

# 『大同報・夜哨』と東北作家

——李文光「路」を中心に——

平石淑子

『大同報』は、満洲国の成立と同時に長春で発行された、満洲国政府のプロパガンダ的性格を持った中国語新聞である。ところが、五ヶ月に満たない期間ではあったが、この紙面に週一回、中国共産党地下組織（以下「地下党」という）の指導する文芸副刊『夜哨』が発刊された。この不思議な因縁に関しては、王徳芬「蕭軍簡歴年表」（以下「年表」という<sup>(1)</sup>）に以下のような記述がある。

（一九三三年）七月、一九三一年に沈陽で蕭軍と知り合いになった陳華が長春から哈爾濱にやって来て、陳が主編する長春『大同報』にもう一つ副刊を創刊したいので原稿を依頼したいと要請した。悄吟（蕭紅<sup>(3)</sup>）が『夜哨』（暗い夜に歩哨に立つという意：原注<sup>(4)</sup>）と命名し、八月五日に創刊し、週一回発行された。そもそも毎日発行されていた『大同報』副刊『大同俱樂部』には、三郎（蕭軍）や悄吟の作品がしばしば掲載されていたのだ。『夜哨』は半年近く発行されたが、李文光の書いた、日本軍の農村における暴行を暴いた文章を掲載したために、強制的に停刊させられた。陳華も離職を余儀なくされ、蕭軍に手紙で、日本の特務や憲兵が自宅

を捜索しに来るかも知れないから準備しておくようにと書いてきた。(括弧内筆者)

一九三〇年、蕭軍は上官ともめ事を起こして沈陽の東北講武堂を離れ、昌図県の陸軍二十四旅団に籍を置いた後、沈陽に戻って憲兵教練所に勤めていた。年表によれば、一九三一年夏、蕭軍は平旦中学の教員で中共地下党員の佟英翹と知り合い、彼を自分の家に寄宿させ、彼の身柄を保護するとともに、その活動を援助したという。陳華が地下党員であったかどうかはわからないが、二人が知り合ったのは佟との関係を通してであったのかも知れない。曹革成『我的嬌嬌蕭紅』<sup>(5)</sup>は、『夜哨』の創刊には、当時中共満洲省委宣伝幹事であった姜椿芳<sup>(6)</sup>及び地下党哈爾濱市西区(道里)委員であった金劍嘯<sup>(7)</sup>と、同じく東区(道外)委員であった羅烽<sup>(8)</sup>らが関わっていたという。また『黒龍江省文学通史』は、羅烽が蕭軍と陳華の友人関係を利用して『大同報』に「中共地下党が指導する最初の文芸週刊『夜哨』を創刊した」としている。いずれにしても『夜哨』が、地下党による文芸刊行物という性格を有していたことに間違いはない。刊頭のデザインを担当したのは金劍嘯だったが、それには「漆黒の夜空の下に鉄条網が広がっている」という図案で、この副刊が、日本の偽政府が統治する暗黒の世界を突き破る圧力となり、抵抗の前哨の陣地となる」という意味が込められていたという。<sup>(9)</sup>

## 二

中国共産党の成立は周知の通り一九二一年だが、中国東北部、特にソ連の影響が強かった哈爾濱においては、それ以前からコミンテルンとの関係でさまざまな動きがあったようである。それについては既にいくつかの文章の中で述べたので、<sup>(10)</sup>ここでは繰り返さないが、中国共産党成立以降、中国東北部には中央(上海)から多くの党員が送り込まれ、組織作りが行われた。彼らはさまざまな文芸活動を通して思想宣伝に努めたが、その中心となっ

た人物が金劍嘯であった。

『中国共産党哈爾濱歴史』<sup>(11)</sup>によれば、哈爾濱市における地下党の活動の拠点となったのは「天馬広告社」、「一毛錢飯店（明月飯店）」と「牽牛房」であった。

一九三三年、道里区中国十三道街路北三十三号の四階建ての建物の一室に金劍嘯によって開かれた天馬広告は、映画の看板などを手がけ、当初の経営は非常に順調だったようだ。金劍嘯は広告社の収入によって一家の生活を支えると同時に、左翼文化人や地下党員の苦しい生活をも援助したという。天馬広告は、一九三四年五月、哈爾濱を脱出する蕭軍、蕭紅の歓送会をその社屋で開いた、およそ一年後の一九三五年五月末に閉鎖される。蕭紅「<sup>(12)</sup>広告副手」はこの広告社での活動を題材としている。

明月飯店、俗称一毛錢飯店は一九三二年冬、中共滿洲省委が哈爾濱の左翼文化人たちに出資を依頼して、道里区中国四道街路北五号に開いた、料理も食べさせる安宿で、地下党員や若い左翼文化人たちの生活を援助すると同時に、地下党の連絡場所の一つになっていたという。蕭軍は哈爾濱に来た当初、ここに住んでいた。『中国共産党哈爾濱歴史』によれば、一毛錢飯店は一九三三年六月、四道街路北から南に移った時に規模もかなり拡大したらしい。しかしその後当局の圧力は日ごとに強まり、一九三四年六月、羅烽が逮捕された前後に営業を停止せざるを得なくなったようである。

牽牛房は、道里区新城大街の南の端の、画家で一毛錢飯店の出資者の一人でもあった馮咏秋の居宅であった。もともとここは馮咏秋が同人たちと結成した文学結社「冷星社」の拠点であったが、次第に若い左翼文化人たちが集まるようになり、彼らの文芸活動を支援する場所となっていた。牽牛房については蕭紅『南市街』<sup>(13)</sup>にいくつかの文章がある。だがここに集まった人々も次々に逮捕され、あるいは東北を脱出し、遂にその活動を停止さ

せざるを得なくなる。『中国共産党哈爾濱歴史』には、牽牛房解散について次のように記されている。

一九三五年、敵は更に常軌を逸し、白色恐怖は日増しに深刻になった。「牽牛房」の活動もこれ以上継続することが難しくなった。左翼作家たちが別れて行く前夜、馮咏秋は一枚の大きな風景画を描き、皆に記念のためのサインを求めた。魯少曾は筆を取ってこのような詩を書いた。

牽牛扮角逐屋塵（牽牛角を扮い屋の塵を逐う）

花小香微有志深（花小さく香り微かなれども有志深し）

但願此画伝千古（但願う此の画千古に伝わらんことを）

尽是名家歴史人（尽く是れ名家歴史の人なり）

「角逐」には互いに競い合うという意味がある。「牽牛房」とは、馮咏秋が朝顔の花（牽牛花）を愛し、夏には家の壁を色とりどりの朝顔が覆ったことによつて名付けられたといわれる。

哈爾濱では、このような場所に自然と、志を同じくする若者が集い、地下党もその集団を積極的に左翼文芸運動へと導いていった。その活動の中で、新聞の文芸欄を使用した宣伝活動は非常に重要な位置を占めており、後の東北作家と呼ばれる人々を育んだ搖籃となったのである。

一九三一年八月十五日、中共満洲省委の指導の下に『哈爾濱新報』が発行され、そこに地下党による最初の文芸副刊『新潮』が発刊されるが、その発刊と編集の任を担ったのは金劍嘯と羅烽であった。『新潮』は一九三二年二月五日に停刊されるまで、およそ百期が発刊されたという<sup>(14)</sup>。また一九三二年末、中共満洲省委が沈陽から哈爾濱に移った後、金劍嘯を中心とする文芸活動はいよいよ活発になり、一九三二年一月三十日、姜椿芳を主編とする党報『満洲紅旗』<sup>(16)</sup>（後に『東北人民報』）が、七月には共青团満洲省委機関報『満洲青年』（九月より『東北青

年」が、九月十八日には中共満洲省委機関報『東北紅旗』（十八期より『東北民衆報』）がそれぞれ創刊されている。『中国抗戦時期瀋陽区文学史』によれば、これらの創刊、編集に係わったのは姜椿芳と金劍嘯で、このほかに満洲总工会の『東鉄工人報』、哈爾濱总工会の『工人事情報』、共青团哈爾濱市委の『反日青年報』、哈爾濱各界反日総会の『民衆報』などがあったという。十一月には松花江の洪水で被災した人々の救済をうたった「維納斯画展」が開かれ、金劍嘯の作品も多く展示された。翌一九三三年七月には金を中心に「星星劇団」が結成された。『夜哨』の創刊は、それから間もなくの八月六日のことである。『中国共産党哈爾濱歴史』によれば、『夜哨』が発行される日には、大同報社の前には『夜哨』を求めて多くの人々が集まったという。

### 三

現在見ることのできる『夜哨』は、活字がつぶれているところも多いほか、句読点が明確でない上、恐らく誤字脱字も多く、また編集上のミスなども重なって非常に読みにくい。筆者が見たものでは一部作者の名前の判別も難しいが、岡田秀樹氏の考察を参考にすると、三十八の名前が確認される。うち十一名は人物を特定することができ、中には複数の筆名を使っている人物もいるので、三十八の筆名の中で、現時点で人物を特定できないものは二十二名分である。この中に姜椿芳など、中共地下黨員がいる可能性は高いが、現在の所確認する手段はない。

人物が特定できるのは李默映、蕭軍、蕭紅、梁山丁、李文光、孫陵、羅烽、舒群、白朗、金劍嘯、陳華である。このうち、最も登場回数が多いのが梁山丁で、二十一期中十四期（作品数は十六篇）に作品がある。文学史などの記述では、最も頻繁に作品を発表しているのは蕭紅だということになっているが、登場回数でいえば二十一期

中十三期（作品数は十五篇）で、山丁に僅かに及ばない。ただ蕭紅の作品は詩が一篇だけなのに対し、山丁は七篇が詩であるから、字数から見れば『夜哨』上では蕭紅が最も活躍した作家という印象があるのかも知れない。ちなみに三番目に登場回数が多い作家が、『夜哨』停刊のきっかけとなった「路（道）」の作者、李文光である。「路」は第五期から第十五期まで、十三期に亘って掲載されており（第六期と記された号、及び第十四期と記された号が、それぞれ二回分存在することは既に述べた）、彼の作品としてはそのほかに最終号に掲載された「黎明」と題された短い脚本があるだけである。結果として『夜哨』は李文光の「路」を掲載するために発行され、停刊されたといっても過言ではない。『夜哨』全体に関しては一ひとまず岡田氏の論に譲り、ここでは『夜哨』停刊のきっかけとなった李文光の「路」を中心に考察することにする。

李文光の経歴については明らかでないが、『黒龍江省文学通史』によれば、当時は中共満洲省委候補委員として楊靖宇<sup>(23)</sup>の下で活動していたということである。岡田氏はこの作品について、次のようにいつている。

この作品の大きな特色は、匪賊をその内部から描いたところにある。匪賊の側から匪賊を描いた作品といえは、蕭軍の出世作『八月の郷村』が思い起こされるが、もちろん「路」はこの作品ほどの重厚さはない。とはいえ、『八月の郷村』に先立つ二年前に、「満洲国」の首都において、匪賊を正面から取り上げた作品が発表されていたことは、注目されていいだろう。（『夜哨』の世界）

岡田氏はここで「匪賊」という表現をしているが、それはあくまでもこの作品がテーマをカモフラージュしていることを汲んでの表現で、この後に「匪賊」が「共産党が組織する解放軍」であることがいくつかの表現から示唆されているという指摘がある。確かに蕭軍の「八月の郷村」は抗日軍に加わった人々の心理的葛藤までを描き、ディテールに未熟さを残しているとはいえず、関内の人々に大きなインパクトを与えるだけのまとまりを持ってい

るが、それは構想こそ東北で練られていたとはいえ、実際に書き上げられたのは東北脱出後であり、様々な表現上の制約は「路」に比べればはるかに少なかったといえるのだから、それと比較するのは些か酷ではないか。筆者はむしろ「路」に見られる情景描写に魅力を感じる。例えば第二回（第六期①：九月十七日）に次のような表現がある。

名前も知らないウズラのような鳥が、新来の見知らぬ客に驚いて、猛烈な勢いで飛び出してきた。放り投げられた石ころのように、近くの蘆の茂みに落ちてゆく。

（中略）

蘆の原を突つ切ると、海の中の島のような原野が現れた。太陽が楽しげに、また穏やかにその上を照らしていた。畑——荒れ果てた畑。荒れ果て、愁いに沈み、静かに、そこに横たわっている。うめき声を上げる気力もはやない。畑の周りにはいくつかの掘つ立て小屋があつたが、戸や窓は失われており、壁も傾いている。一体こうなつてからどれほどの年月がたつているのか、まるで野ざらしだ。

そこにポロポロの綿入れをまとつた中年の農婦と一歳くらいの子ども、恐ろしく痩せた、体中できものだらけの犬が姿を現す。「貧困、飢餓、離散、病氣、破滅……それだけがこの財産だつた」。また次のような描写もある。

広々と広がる遙かな原野が大きく波打っている。視線の先に青々とした樹木の茂みがあり、天と地を分けている。天の翼はあのように低く、木々の上に垂れ下がっている。この大きな自然の絵画を見れば、幻想の世界に引き込まれていくに違いない。

視界の果てのあの木々、あれは童話の中の天と地が縫い合わさっている場所ではないだろうか。あそこまで行こう。木に登れば天の足元に触れることができる。そして神秘的な天の階段を登り、楽しい天の国へ行

くことができる……

だがそこまでたどり着くと、なおも高い空と遙かな原野。視線の果てに、また別の木々が相も変わらず現れるのだ！また同じように、天と地が交わった絵画が現れる。(第九回：第十二期、十一月五日)

黄昏の翼が次第に平原を覆い、村を覆い、すべてを覆った。小さな星が、一つまた一つと現れた。淡い緑色の光を放って私の頭上に輝いていた……(第十回：第十三期、十一月十二日)

いずれも東北の果てしのない原野を生き生きと、郷愁と愛情を込めて描写している。しかも第九回の描写は、自分の進む道には希望はあるけれども、その希望はまだまだ手の届かない遙かな先にあること、それが分かっている。自分自身は希望を求めて先に進まねばならないことを暗示しているように思われる。また太陽などの自然物を擬人化することにより、自身の存在が東北の大自然と一体であることを示すような描写は、蕭紅の作品にも顕著に見られたことである。<sup>(24)</sup>このようにいわゆる絵画的な手法、或いは自然物を擬人化する手法は東北作家たちの中でも独特のもので、これまでは蕭紅の独自性として高く評価されてきたが、「路」を読む限り、その手法は一人蕭紅にのみ独占を許すものではなかったようである。蕭紅の作品の絵画性に関しては、蕭紅自身が絵画に深い関心を持ち、画家になりたいという夢を有していたことが根拠として挙げられているが、「路」に見える絵画性も、李文光の経歴を知るひとつの手がかりとなり得るかも知れない。

既に述べたように、この作品は第六回に掲載ミスがあり、また恐らく当局の追求を回避するためであろう、方言や隠語と思われるような言葉が頻繁に使われており、更に活字に判読できない部分も多く、ストーリー自体を追うことが非常に困難ではある。だが十三回にも亘って連載されたこの作品のどこが当局の注意を引き、『夜哨』停刊のきっかけとなったのかについては、追求しなければならない。



この作品の意図は作品の冒頭で既に明らかにされている。

この作品は、遠く国を離れた于振二君、別の世界で制約を受けている暁君、野良に出ているすべての仲間たちを記念するものである。

よく読めない部分もあるが、大意は恐らく損なつてはいまい。「遠く国を離れた于振二君」は命を落としたのだろうか。「別の世界で制約を受けている暁君」は恐らく牢に繋がれているのだろうか。「野良に出ているすべての仲間たち」は抗日義勇軍に参加して戦っている人々を指すのだろうか。

当時『夜哨』に投稿した人々はほとんどが哈爾濱にいたようで、「東北現代文学史初歩調査総述」によれば、「蕭軍が原稿を集め、校閲した後、陳華に渡した。原稿料は、新聞社が蕭軍に渡して分配させた」という。また『中国抗戦時期淪陷区文学史』は羅烽の「憶在哈爾濱從事反日闘争」（筆者未見）に「毎回どの原稿を掲載するかは、哈爾濱の何人かの同志が相談して決めた」という一文があることを紹介している。『夜哨』に掲載する原稿に関しては蕭軍のほか、何人かが目を通し、場合によってはある程度の修改を施していた可能性が高い。ところが「路」の最終回は、それまでの文と明らかに異なり、表現の露骨さが突出している。例えば一夜の宿を提供してくれた貧しい農民と心が通じ合い、「新たに勝利の喜びと歓喜を感じ」た「私」は心の中でこう叫ぶ。

異生子（原文のまま）、腐った奴ら！消え失せろ！我々は永遠に活気に満ちあふれた新たな仲間と共になだれ込む。我々は永遠に腐りきった成分を洗い流し、新しく健康な成分を切り引き入れる！（括弧内筆者）

「異生子」は「異邦人」と読み替えられるだろうか。突然大きな音が轟き、「私」の視界に小さな黒い点が映る。その点はどんどん大きくなり、ついに人の体ほどの大きさになって「私」の頭上を低く掠めていく。「私」の目に「操縦していた奴」の頭がはっきりと見えた。その機械仕掛けの鳥は痰を吐き、また糞をまき散らす。赤や緑のそ

れらを拾い上げた「私」は「ポケットからマッチを取り出し、それらを簡単な火葬にしてやった」。「機械仕掛けの鳥」が日本軍の飛行機であろうことは容易に想像が付く。更に気分の高揚した「私」は、恐らく数時間以内に百余人の武装した農民たちが銃を背負った旦那方に挑みかかるだろうと明言し、思わず「立て……」で始まる歌（インターナショナル：筆者）を口ずさみかけるが、すぐに後悔の念に襲われる。

「なぜこの歌を歌うのか」

本当のところ、東方人を相手にするという調子で、ことに一人でこの歌を歌うなら、この歌の偉大さと雄壮さを減じることにはしかならない。だから私は軽々しくたった一人でこの歌を歌いたくはないのだ。

わかりにくい文章だが、ここでいう「東方人」は明らかに日本人を指している。そして作者はこのような言葉で作品を締めくくる。

それは五月、それは詩のような原野、賑やかな、それは戦地、散兵戦の最前線、殺戮の季節だ！

はるか遠くからかすかな銃声と騒々しい人の声のような音が聞こえてくる。

道はなお静かに悠然と、うねりながら、伸びていく……

『蕭軍評伝』に次のような文章がある。

『夜哨』は八月六日に創刊され、毎週一回、全部で二十一期が発行された。李文光の、日本兵が女性を強姦し暴行するという文章を掲載し、陳華が原稿を審査する時に手を入れなかったたので、すんでの所で日本の憲兵に捕まり、拘置所に放り込まれるところだった。陳華は出奔した後、手紙で蕭軍に注意を促した。「家中の妥当でない新聞や書籍をすべて速やかに焼き捨てろ、日本の憲兵が君の所に調べに来ないように」。蕭軍、この大ざっぱな男は、これに對してまるでとりあおうともしなかった。その後、彼らの住居の周りに、果たして

疑わしい人影が出没するようになった。やはり蕭紅は用心深かった。彼女は真剣に本や新聞を調べあげ、明らかに反滿抗日の傾向のあるものを焼き捨てた。だが彼女は全二十一期の、一生懸命編集した『夜哨』を火にくべてしまうことに忍びなく、それを丁寧に金剣嘯に渡し、代わりに保存しておいて欲しいと依頼した。情勢は日に日に緊迫していた！

但し李文光の文章には日本軍が女性を暴行する場面は見当たらない。「蕭軍評伝」の文章がどこまで事実を反映したものであるかはわからないが、原稿が掲載前に何人かの目を通っていたのであれば、なぜ最終回にこのような挑戦的な表現を残したのだろうか。自身の身の安全に関わることであるから、哈爾濱から送られてくる原稿に陳華が全く目を通さなかったとも考えにくい。万に一つの可能性として、手を入れる前の原稿を不用意に掲載してしまつたということも考えられないが、『夜哨』に関わつた人々の多くが二十代の血気盛んな若者たちであつたことを考えると、最終回はやはりこのまま載せてしまおうと考えたのではないかと思いたい。彼らの高ぶる心はもはや最終回に手を入れ、カモフラージュすることの欺瞞性を許せなかつたのではないだろうか。

「路」の最終回が『夜哨』第十五期（十二月三日）であり、その後『夜哨』は第十八期まで発行されたことを考えると、当局の関心を引いたのは恐らくこの「路」の最終回であつたと思われる。既に述べたように、李文光は最終号に「黎明」と題した短い脚本を発表している。ある村のある貧しい農家が舞台である。農家の住人は六十歳を過ぎた老女と二十五、六歳の息子の嫁、小石頭と呼ばれる十歳の孫の三人である。この村に「匪賊」の軍隊が襲来しようとしている。村に若い男はほとんどいないようだ。小石頭は家の手伝いをしながらピオニールの歌を口ずさんでおり、昨夜偵察に出て戻ってきた若い二人の兵士とピオニール式の挨拶を交わす。この若い兵士が共産党の指導する抗日義勇軍の兵士であることは明らかだ。兵士二人は「匪賊」の襲来に備え、司令部宛ての秘

密の文書を子どもたち（十四歳のピオニール指導員の娘、九歳の女の子、そして小石頭）に託す。子どもたちが家を出た直後に「匪賊」がやってくる。彼らはさすがに、またいやらしい笑いを浮かべながら家の中を探し回り、体を検査するふりをして息子の嫁の胸に触れたりする。彼らのたどたどしい台詞からも、この「匪賊」が日本人を指していることもまた、明らかである。「匪賊」たちが家から出て行った後、外で彼らの声がする。「畜生め、女のほかに老いばればかり残しやがって。（中略）じじいたち、皆殺しだ、誰も彼もかまわん、家はみんな焼いてしまえ……」。火をかけられると知ってうろたえる二人の女性の目に、「匪賊」たちの目を逃れて村を脱出する子どもたちの姿が映る。

「あの子たちは大人よりよほど役に立つよ。大人がいなくなっても、子どもたちが後を継いでやってくれる、これが運命なんだ」という老女の台詞は、そのまま『夜哨』を停刊する彼らの胸の内を語っているように思われる。そして陳華も、最終号の「夜哨的絶響（夜哨の最後の響き）」でこのようにいう。

満洲に活気に溢れた文芸期刊がほとんど無かったので、数名の努力で、新しい姿を人々に披露しようと考えた。五ヶ月前の朝、『夜哨』は諸君に見<sup>ま</sup>えることになったのだ。（中略）以前努力した数名は、この子（夜哨）は我々の考えとは合致しない方向に育ってしまったと感じるようになった。心血という乳を飲むことをいやがるようになり、それならばと子守たちが食べさせたくないようなものも口に押し込んでみたのだが、子どもはどんどん痩せていき、泣き声を上げることもできないほど、また自分で子守を呼ぶことができないほどにやせ細ってしまったのだ。それならば急いで自分の口を塞ぎ、周囲の善意の人々の邪魔をしない方が良かったです。以前「生命の力」という言葉で端を開き、今「夜哨の最後の響き」で終わりとする。（中略）だが私は落胆してはいない。ほかの豊かな食料に満たされた子どもたちが出現するという希望があるからだ。

(括弧内筆者)

わずか五ヶ月前に「社会は君自身に帰納し、君自身から更に生命の『力』に帰納する。ちょうど逆さまになった円錐形のように堆積していく。その円錐形の最も尖鋭な重心が、即ち生命の『力』なのだ。友よ、見よ、君はかくも偉大で重要なのだ。君はなぜ自身を生かそうとしないのか。死んだ犬のように水に流されていくことを望むのか。立て、立ちあがれ、これが『夜哨』の忠告だ」と檄を飛ばして創刊された『夜哨』は、こうして終焉を迎えた。

既に述べたように、『夜哨』の停刊には多分に確信的な部分がある、と筆者は考える。『夜哨』を継続しながら、地下黨員たちは『夜哨』の同人でもあった白朗を『国際協報』の女性記者として送り込んでいる(一九三三年夏)<sup>(26)</sup>。「夏」というのは具体的にいつか、特定はできないが、穿った見方をすれば、「路」の連載開始が九月十日であるから、その連載を決めた時に、既に停刊を予測していたのかも知れない。停刊を覚悟で「路」を連載した。最終回を迎え、彼らは自分たちを押さえることができなくなった。果たして停刊となったが、彼らは敢えて最終号に、問題となった「路」の作者と全く同一の筆名による「黎明」を掲載し、陳華の「夜哨的絶響」と呼応させた。この推測が当たっているなら、『夜哨』が継続している間に白朗を国際協報社に送り込み、『夜哨』停刊後直ちに、白朗を主編に据え、『国際協報』上に文芸副刊『文芸』を創刊した、そのフットワークの良さに対する一つの説明になり得るのではないか。『夜哨』の停刊は一九三三年十二月二十四日、『文芸』の創刊は一九三四年一月十八日である。<sup>(27)</sup>発行された場所が哈爾濱という、満州国の中心からやや離れた場所であったためか、『文芸』はこの時期のものとしては比較的息が長く、一九三五年一月十五日まで、全四十八期が発行されている。

『文芸』の停刊後、彼らの活動は更に『黒龍江民報』副刊『芸文』(一九三五年五月四日創刊)に引き継がれて

いった。そして地下党の主導するこれらの活動は、中心的存在であった金劍嘯の逮捕（一九三六年六月十三日）、処刑（八月十五日）によって終焉を迎える。

『夜哨』が停刊された後の陳華の足取りはわからないが、その後を継いで『大同報』の編集者となったのは、『夜哨』に梅陵の筆名で「秋」（第十四期①）と題する詩一篇を投稿している孫陵である。彼は副刊『滿洲新文壇』を編集、『夜哨』絶響後の寂寞を打ち破る「ために奮闘努力した」という。だが彼も一九三六年十月、東北を離れ、その後関内でそのほかの東北流亡作家たちと合流し、戦地服務団や訪問団に参加、また桂林で『自由中国』を復刊するなどの活動を行ったという。<sup>(28)</sup>

既に述べたように『夜哨』は読めない部分が多く、筆者の想像によって補っている部分も少なくない。従って読み違いなどがある可能性は否めない。江湖の指摘、批判を待ちたい。

#### 注

- (1) 『蕭軍記念集』（梁山丁主編、一九九〇年、春風文芸出版社）所収
  - (2) 一九〇七〜八八年、遼寧省出身。『夜哨』には「三郎」の筆名で五篇の詩と散文一篇を発表している。
  - (3) 一九二一〜四二年、黒龍江省出身。『夜哨』には詩一篇、散文二篇、小説七篇を発表している。当時は蕭軍と同居していた。
  - (4) 『夜哨』の命名者については、資料によって蕭軍としているものもあるが、年表の前言に蕭軍の『年表』閱後記<sup>(29)</sup>が付されていることにより、本稿ではこれに依ることとする。
  - (5) 二〇〇五年一月、時代文芸出版社
- 曹は、陳華と蕭軍は小学校時代の同級生であったとする。

- (6) 一九二二〜八七、江蘇省出身。一九二八年に哈爾濱に至り、三二年に入党。中共滿洲省委宣傳部、共青團滿洲省委宣傳部長などを歴任する。金劍嘯と同時に逮捕されるが、金が彼をかばったために証拠不十分で釈放され、直ちに上海に逃れる。その後は翻訳の仕事に従事し、ソ連の映画や戯曲、小説などを多く翻訳したという。『黒龍江省文学通史』：二〇〇二年十二月、北方文芸出版社 など)
- (7) 一九一〇〜三六年、遼寧省出身。一九三〇年上海で中国共産主義青年団に参加、その後入党して哈爾濱に戻り、党の指示の下に姜椿芳と共に文芸活動に従事する。
- (8) 一九〇九〜九一年、遼寧省出身。一九二九年入党、その後間もなく白朗と結婚する。
- (9) 徐酒翔・黄万華『中国抗戦時期淪陷区文学史』（一九九五年七月、福建教育出版社）
- (10) 平石「ハルピンの抗日文芸運動緒論—金劍嘯の活動を中心に」（『人間文化研究年報』第九号、お茶の水女子大学人間文化研究科、一八八五年）、「星星の火、広野を焼くべし」（『大正大学研究論叢』第十三号、大正大学出版部、二〇〇七年三月）、「牽牛房」をめぐる—蕭紅『南市街』より」（『中国東北文化研究の広場』第一号、滿洲国文学研究会、二〇〇七年九月） など
- (11) 中共哈爾濱市党史研究室編、二〇〇一年十一月、黒龍江人民出版社
- (12) 『跋渉』（一九三三年十月、五日画報印刷社）所収
- (13) 『南市街』（一九三六年八月、上海文化生活出版社）は哈爾濱での生活を描いた散文集である。この中の牽牛房に関する文章に関しては平石『牽牛房』をめぐるにまとめている。
- (14) 『中国抗戦時期淪陷区文学史』による。なお千里草「東北現代文学史初歩調査総述」（『淪陷区中国文学研究』：二〇〇七年一月、黒龍江人民出版社 所収）は、停刊となったのは、一九三二年九月、松花江の大洪水で社屋が水に浸かったためだとする。
- (15) 一九三二年十一月に沈陽の滿洲省委が破壊され、十二月、哈爾濱で再組織された。
- (16) 党の要請により金劍嘯がイラストを担当することになり、これを通じて姜椿芳と知り合ったという（『東北現代文学史初歩調査総述』）。

(17) 号数の乱れ(第六期と記された号、及び第十四期と記された号がそれぞれ二回存在する)があることは既に指摘されているが、そのほか、『夜哨』停刊のきっかけとなった「路」についても、第八回(第十一期——実際は十二期：一九三三年十月二十九日号掲載)の文末に「訂正」として、十月十五日掲載の第六回十六行目以下を間違って掲載してしまったので、本期の文を差し替えて欲しい、という一文がある。この訂正文にしてもよく読めない部分があり、また第八回とされたこの部分を第六回十五行目に挿入するだけなのか、あるいは挿入後、第六回十六行目以下第七回の全文を削除するのか、明確ではない。

また、連載物に関しては、内容によって回を分けるというよりも、スペースによって文を区切っているのではないかと思われる節があり、ほかにも脱落や乱丁があることは十分に考えられる。

- (18) 『夜哨』の世界』(『外地』日本語学論)二〇〇七年三月、世界思想社)
- (19) 一九二四〜九五年、遼寧省出身。
- (20) 一九二四〜八三年、山東省出身、一九二五年に一家で哈爾濱に移住する。
- (21) 一九一三〜八九年、黒龍江省出身。
- (22) 一九二二〜九四年、遼寧省出身。
- (23) 一九〇五〜四〇年、河南省出身。一九二七年入党、二九年春、満洲省委に派遣される。
- (24) 蕭紅の作品の表現上の特徴については平石『蕭紅研究——その生涯と作品世界』(二〇〇八年二月、汲古書院)を参照したい。
- (25) 王科・徐塞・張英偉著、二〇〇八年一月、中国社会科学出版社
- (26) 『黒龍江文学通史』
- (27) 『東北現代文学史初歩調査総述』
- (28) 『中国抗戦時期淪陷区文学史』及び沈衛威「現代東北流亡作家的運動軌跡」(『中国淪陷区文学研究』所収)